

トラック 2-1

昔々、イブナシーヤという男がいた。彼はとても悪賢い人間だった。或る日、とても冷たい井戸を持っていたスルタンが、その井戸に 2 日入って死ななかった者には金を与えると約束した。多くの者が挑戦したが、耐えられる者はおらず、皆死んでしまった。イブナシーヤはおばあさんに、試してみようと提案した。彼女はまず無理だと思った。狐のように悪賢いイブナシーヤは、井戸のあるところに行き、彼のおばあさんが息を吸えるために空気が通るよう穴を開けた。

彼はおばあさんをスルタンに紹介したが、スルタンは尋ねた。

「イブナシーヤよ、お前は本当に、おばあさんが井戸の中で持ちこたえると思っているのか？」。

彼は答えた。

「はい、持ちますよ」。

スルタンはおばあさんを井戸の中に降ろした。イブナシーヤは絶えず、おばあさんのところに行って次の問いを発した。

「おばあさん、いますか？ まだ生きていますか？」。

或る人が、イブナシーヤが頻繁に行き来するのに気づき、おばあさんがまだ生きていると確認した。スルタンは井戸を開けさせ、おばあさんにを地上に引き上げた。イブナシーヤは、おばあさんが生き延びたので、報酬を要求した。第三者が割って入り、言った。

「いいえスルタン様！ 何も与えてはなりません。イブナシーヤは祖母を暖めるために、たびたび炭火を持って来ました」。

この申し立てで、スルタンはイブナシーヤに金を与えるのを拒んだ。

或る日、イブナシーヤは預言者生誕祭のために町中の人を招待した。彼は鍋を火から 3m 離して置いた。招待客は、生誕祭の祈りを唱えるのを終えてから、イブナシーヤに食事を要求した。彼は答えた。

「もう少し待って下さい。火が十分に強くないので」。

スルタンは立ち上がって言った。

「お前は火から 3m 離して置いた米をどうするつもりだ。煮えるわけがないだろう」。

そこでイブナシーヤは答えた。

「そんなことはありません。煮えますよ。行ってみればわかります」。

スルタンは鍋の蓋を持ち上げて、米が煮えていないことを認めて言った。

「我々に何をしようとしているのだ？ この米は火から遠いので煮えるはずがない。そんなことはあり得ない。嘘をつくんじゃない」。

イブナシーヤは言い返した。

「そういうことならば、おばあさんに与える金を工面して下さい。何故なら、おばあさんから離れた炭火がどうやって、井戸の中の彼女を暖めることが出来るのかわかりません。我々に渡す金を探してください」。